

■言語文化専攻博士後期課程研究指導者一覧

教授 秋山 朝康

専門領域 言語テスト、動機付け、自律ある学習者

研究内容

応用言語学の一分野である言語テストを研究しています。特にパフォーマンステスト(スピーキング・ライティング・教員採用試験の2次試験、技能統合の評価)や語用論の評価に興味をもっています。また言語テストは様々な分野と関連するため、動機付け、自律ある学習者の育成、教育測定・評価、言語政策などの分野などにも興味を持っています。これからは妥当性理論とパフォーマンステストの開発・分析を研究していきたいと思っています。どんな場合でも英語教育現場を見据え、そこへ還元できるような研究にしたいと考えています。

教授 芦田川 祐子

専門領域 英米文学、児童文学

研究内容

英語で書かれた文学、主としてイギリス小説や児童文学とその批評を研究対象としている。関心のある領域は文学における「子ども観」のほか、おとぎ話やファンタジー、メタフィクションが中心で、今ここにはない世界をことばで構築することへの意識や「読む」「語る」という行為の意義を考えさせるような、批評として読めるフィクションに注目してきた。研究指導においては、自分および他の研究者がものを考えたり書いたりするプロセスについて意識的になれるよう、丁寧な読解と話し合いを目指している。

教授 鬼山 信行

専門領域 現代日本語文法、特に従属節とモダリティ

研究内容

現代日本語の従属節とモダリティ・時制の関係の研究が一区切りついたので、現在はそれをふまえて文の構造の研究をしている。これは、文が大きく四段階の階層を持つという従来の議論に対して、階層の数を減らす方向に働くと考えている。また、それとは別の方向性を持つ研究だが、従属節におけるモダリティの形式の生起の実際を調査している。これはモダリティの形式の従属節における分布をみることで、モダリティの形式のこれまでにない特徴づけが可能になるという見込みを持っている。

教授 紙 宏行

専門領域 日本中古・中世文学

研究内容

日本の中古および中世の文学、とくに和歌文学を専門としている。平安末期から鎌倉初期にかけての和歌表現の変革に、表現理論(歌論)や古典和歌研究(歌学)がどのように関与したかを考えている。近年は、顕昭の難義語注釈書『袖中抄』を中心に読み進め、そこからうかがえる和歌表現の基板や原拠、源俊頼・藤原顕輔・藤原俊成からの影響、歌ことばの歴史、万葉学などについて考察を進めてきた。また、近年は、説話文学にも視野を広げ、和歌や芸道の存在意義や社会的位相などについて研究を進めている。

教授 川口 良

専門領域 日本語学・日本語教育・社会言語学

研究内容

日本語学及び社会言語学の知見を日本語教育に応用するための研究を行う。地域方言や性、世代、集団などに起因する社会方言に加え、非母語話者によって産出された日本語を対象として、「話しことば」「書きことば」の両面において、「談話分析」の手法を用いて観察し、考察する。現在は、「ことばのゆれ」に起因する日本語の「バリエーション」(言語変異)に焦点を合わせ、研究している。

教授 蔣 垂東

専門領域 日中対照研究、中国語学

研究内容

(1)「中国資料」と呼ばれる中国の古文獻に見られる中国人が漢字を使って書き写した日本語の記録を対象に、中国語音韻史や漢語方言の方面から日本語の表音に用いられた漢字の基礎音系を明らかにすることを通して、それに反映された各時代の日本語の音韻について考察する。(2)漢語方言分野では、特に福建省内の上古音の特徴を色濃く反映し、日本漢字音の呉音・漢音とも関連をもつ福州方言および呉方言地域に隣接し、未解明の点が多い浦城方言を主要な研究対象としている。

教授 白井 啓介

専門領域 中国近現代演劇論、中国映画史

研究内容

従来は、牢固な体系を築いた文語文表現と決別した20世紀中国近現代文芸の実相解明の一環として、台詞劇である「話劇」の言語表現を考察対象としてきた。近年では、これとほぼ同時代に呱呱の声を挙げた中国国産映画の生成発展過程を解明することで、口語舞台芸術から映像芸術への展開の機縁と動因を追究している。目下は、19世紀末に伝来した映画という新興表現形態が、米仏映画の急速な成長に押されながら、これを参照する段階から、競合と棲み分けを経て中国国産映画として地歩を築く過程の究明に注力している。

教授 鈴木 健司

専門領域 日本文学(近代)

研究内容

宮沢賢治の研究を中心に坂口安吾、井上ひさし、大江健三郎などと格闘している。特に宮沢賢治はライフワークとして位置付けており、宗教や科学の側面から、宮沢賢治作品の文学としての価値の解明を目指している。現在は、その一環として、地学的想像力のテーマを掲げ、フィールドワークに基礎をおいたテキスト生成の分析を行っている。

教授 長谷川 清

専門領域 中国民族文化史、文化人類学

研究内容

東アジアを対象とした歴史学・文化人類学を専攻し、中国沿海地域、沖縄、雲南、タイなどで少数民族を対象にした調査研究に従事してきた。これらの人々がもたらしてきた伝統文化はそれぞれに特徴があり、多様性に富んでいるが、市場経済の浸透や開発政策の拡大のなかで急速な変化が進行している。目下の研究課題は、少数民族が漢民族の文化をどのように受容しているかについて、社会経済、宗教信仰、風俗習慣、言語などの側面から比較することである。また、これまでに収集した資料の整理と民族誌としての記録を進めている。

教授 福田 倫子

専門領域 日本語教育、第二言語習得、言語心理学

研究内容

第二言語を学ぶ学習者の内側で何が起きているのかを知りたいと考え、研究に取り組んでいる。第二言語習得研究において構築されてきた諸理論をふまえ、言語心理学的な観点からの実証的な研究を行っている。言語を処理する際に人間の頭の中で引き起こされる現象を、主に認知心理学的な側面である記憶や理解の面から解明することを目的としている。その際には実験的手法を用いる。また、動機づけやビリーフ等の情意面に焦点を当てた研究にも興味を持ち、深めていきたいと考えている。

■言語文化専攻博士後期課程授業科目名・講義等の概要

授業科目の名称	担当者	授業科目設定のねらいと概要
言語文化研究特別演習 I－(1) (日本語教育学)	川口 良	現代は、かつてないほど大量の「日本語バリエーション」が生み出されている。日本に長期滞在する日本語非母語話者の数が大幅に増加している現在、非母語話者が会話の現場でバリエーションをめぐるさまざまな日本語問題に直面することは想像に難くない。本演習では、日本語教育が日本語のバリエーションと取り組んでいくためには何が必要なのかという視点から、種々の研究課題を設定する。
言語文化研究特別演習 I－(2) (日本語教育学)	川口 良	「言語の動態」として「日本語のバリエーション」を捉える視点から、日本語教育と種々の言語変種(地域方言、社会方言、スタイルなど)や言語変異(ラ抜きことばなど)の関係について、掘り下げて検討する。これまでは、日本語母語話者間のネイティブ場面におけるバリエーションが注目されることが多かったが、接触場面における母語話者のバリエーション(フォリナートーク)や非母語話者間のバリエーションに注目し、日本語教育の取り組むべき課題を明らかにしていく。
言語文化研究特別演習 I－(3) (日本語教育学)	川口 良	人間は社会化していく過程で、場面に応じた言語変種を使い分ける社会言語能力、多変種能力(バリエーション能力)を身に付けていく。日本語非母語話者はさまざまな場面で日本語バリエーションのインプットを受けつつ、どのような過程を経てどのようなバリエーション能力を習得していくのだろうか。言語使用者のバリエーション能力を解明することによって、日本語教育と日本語のバリエーションをめぐる問題を総合的に解き明かしていく。
言語文化研究特別演習 I－(1) (日本語教育学)	福田 倫子	博士後期課程において研究を行う前提として、幅広い視野と専門性の高さの両面を備える必要があるだろう。本演習では、初めに日本語教育における諸問題について考えることで日本語教育全体を俯瞰するきっかけとする。続けて、第二言語習得(SLA)研究に焦点化する。習得のメカニズムを明らかにし、学習者の中間言語を探るためには様々な観点からの検討が必要となる。当該分野における研究を知ることにより、新たな課題を自ら発見し追究する。
言語文化研究特別演習 I－(2) (日本語教育学)	福田 倫子	2019年度非開講
言語文化研究特別演習 I－(3) (日本語教育学)	福田 倫子	2019年度非開講
言語文化研究特別演習 I－(1) (日中対照研究)	蔣 垂東	『鶴林玉露』(1252)から『東語入門』(1895)まで中国の古文書に見られる中国人が漢字を使って書き写した日本語の資料を対象に、日中間の語文交渉史および音韻史におけるこれらの資料の重要性について探求する。一年目は、日中両国の交流史に立脚して、各時代の日本語を記録した資料についてそれぞれの時代背景、および伝存状況を中心に考察を進める。 論文指導では、発表を通して、研究テーマを明確にしつつ、文献・データの収集・調査・扱い方、そして先行研究の掌握などの基礎能力を高め、資料を徹底的に読み込む研究手法を身につけさせる。
言語文化研究特別演習 I－(2) (日中対照研究)	蔣 垂東	13世紀から19世紀までの中国の古文書に見られる中国人が漢字を使って書き写した日本語の資料を対象に、日中間の語文交渉史および音韻史におけるこれらの資料の重要性についての探求を深める。二年目は、漢語方言と音韻史に立脚して、各時代の資料における日本語の表音に用いられた音訳漢字の用法を中心に考察を進める。論文指導では、本格的にテーマの研究に取り組み、口頭と発表などの形で成果を研究会や学会の場で段階的に発表できるよう、助言・指導する。
言語文化研究特別演習 I－(3) (日中対照研究)	蔣 垂東	13世紀の『鶴林玉露』から19世紀の『東語入門』までの中国の古代文献に見られる中国人が漢字を使って書き写した日本語の資料を対象に、日中間の語文交渉史および音韻史におけるこれらの資料の重要性についての探求を深める。三年目は、これまでの検討で明らかになった音訳漢字の用法を踏まえ、音訳漢字に反映されたそれぞれの方言のその当時の実態について考察した上、その方言の現代までの変遷の解明を目指す。論文指導では、学会発表や雑誌論文と並行して学位論文の作成について助言、指導を行う。
言語文化研究特別演習 I－(1) (第二言語習得研究)	秋山 朝康	2019年度非開講
言語文化研究特別演習 I－(2) (第二言語習得研究)	秋山 朝康	2019年度非開講
言語文化研究特別演習 I－(3) (第二言語習得研究)	秋山 朝康	2019年度非開講
言語文化研究特別演習 I－(1) (日本語学)	鬼山 信行	現代日本語文法の中でも、モダリティを研究対象に据え、その従属節への現れを着眼点にして探求する。モダリティはこれまで主に文における現れが研究されてきた。従属節における現れを主要な分析対象にすることは新しい切り口である。本時においては、準備として従属節とモダリティそれぞれの研究を俯瞰して主要な研究対象を決め、これまでのモダリティの研究の結果を踏まえつつ、従属節における現れに基づいた新しい見方を与える。その一方で、理論的背景の研究、周辺の範囲を対象とした研究などの構想を練る。

授業科目の名称	担当者	授業科目設定のねらいと概要
言語文化研究特別演習Ⅰ－(2) (日本語学)	鬼山 信行	現代日本語文法の中でも、モダリティを研究対象に据え、その従属節への現れを着眼点にして探求する。本時においては、しかるべき学会で研究発表を通じて研究内容の一層の彫琢をはかり、学位論文執筆への道確かなものにするるとともに、別の目標として理論的背景や関連する問題についての研究を進め、これも学会や研究会などでの発表を経て、論文として刊行することを目指す。
言語文化研究特別演習Ⅰ－(3) (日本語学)	鬼山 信行	現代日本語文法の中でも、モダリティを研究対象に据え、その従属節への現れを着眼点にして探求する。本時においては、すでに刊行した論文や学会発表を済ませた研究内容を盛り込んで学位論文の執筆を進め、特定の範囲のモダリティについて、先行研究の成果を踏まえつつ、モダリティの形式の従属節への現れの分析から得られる新しい見方を提出する。
言語文化研究特別演習Ⅱ－(1) (日本近代文学)	鈴木 健司	近代文学の分野における学位論文の指導をおこなう。指導の実際にあつては、1年次では、論文の全体の構想、研究の特色、意義を明確にさせ、演習形式で発表させることにより、質の向上を促す。宮沢賢治を例に挙げるなら、童話、詩の両ジャンルを横断する特質をふまえ、かつ、それぞれの表現・思想の豊かさに気付かせる。そのためには、先行研究の調査はもとより、化学・地学・物理学・音楽・心理学・民俗学・宗教学など、常識的な文学の領域を越境する知識に関しても、積極的に取り組む姿勢を学ばせる。
言語文化研究特別演習Ⅱ－(2) (日本近代文学)	鈴木 健司	近代文学の分野における学位論文の指導をおこなう。指導の実際にあつては、2年次では、学生自身が主張する研究内容のオリジナル性と研究的価値を考えさせ、博士論文の素材と成り得るか否かの検証を行う。演習形式の授業で定期的な発表を義務づけ、発表内容を文章化し提出させることにより、博士論文の前段階となるレベルの訓練を繰り返す。学内での口頭発表や、共同研究などにも積極的に参加をさせ、経験を積み重ねさせることも重要である。
言語文化研究特別演習Ⅱ－(3) (日本近代文学)	鈴木 健司	近代文学分野における学位論文の指導を行う。指導の実際にあつては、3年次では、学位論文提出に向け、授業時に論文の内容、形式両面に関するチェック・アドバイスをを行い、学位論文としてのレベルに達するよう指導する。常に先行研究に関して調査・確認を行い、論文としてのオリジナリティーを確保させる。その上で、全国レベルの学会で口頭発表を行えるよう準備させ、さらには、学会雑誌への論文投稿を積極的に勧める。
言語文化研究特別演習Ⅱ－(1) (中国文学)	白井 啓介	19世紀から20世紀にかけての中国現代文藝の中、上演藝術としての話劇(台詞劇)及び映画の歴史、その作家・作品、表現流派を取り扱う。初年度は、春学期には(A)修士課程での研究成果の吟味から着手し(1-4回)、(B)追究する対象を多面的に検討(5-8回)、(C)先行研究、定説を系統的に整理し(9-12回)、(D)新たに研究する余地を洗い出す(13-15回)。秋学期には、有効な方法を探るべく、(E)日中欧各研究状況を参照しつつ検討する(16-19回)。その上で、(F)実作品の読み込み、作品分析を進め(20-25回)、(G)ここから発見し得た知見を小論にまとめる作業に入る(26-30回)。
言語文化研究特別演習Ⅱ－(2) (中国文学)	白井 啓介	次年度では、初年度の成果を踏まえ、(A)研究者自身の独自の読み、発見を付け加えるべく多角的な視点を探る(1-4回)。次に、(B)近縁、隣接作家や作品、流派との比較衡量を行いつつ、さらなる閲読、作品検証を深める(5-11回)。(C)ここから得た知見を小論にまとめる(12-15回)。(D)執筆の過程で進めた思索に基づき構想を拡張し(16-19回)、(E)補強すべき論点を諸家の研究成果に求める(20-24回)。こうして得た新たな段階の知見を、(F)同時代性の中に位置付けるため歴史研究の成果と照合し(25-27回)、(G)疑問とその解明を反復させつつ独自の見解構築に導く(28-30回)。
言語文化研究特別演習Ⅱ－(3) (中国文学)	白井 啓介	3年次では、前2年の研究活動の基礎の上に、まずは博士論文の中間評価論文を提出して審査を受ける。そのための相談指導(1-4回)。次に、各審査委員から指摘があった修正点等につき修正加筆を行い(5-7回)、その上で本論文の全体構成と記述の不備、不足につき改稿を進める(8-11回)。これと平行して、学会または紀要へ論文を投稿するための洗い直しと適合化を行う(12-15回)。夏期休業中に、さらに本論文の練り上げをすすめる。その上で、秋学期には各章ごとの再検討、検証を進める(16-20回)。十月末を目処に、一応初稿完成を目指し、これにつき細部の記述の校正、資料の漏れ等がないよう再チェックを続ける(21-23回)。各章ごとに再点検を進めるとともに、注記、参考文献の照合確認も併せて行う(24-26回)。こうした点検と度重なる修正を経た本論文の読み合わせ、突き合わせを行い(26-28回)、最終確認を行った本論文を12月の指定日に提出する。
言語文化研究特別演習Ⅱ－(1) (比較文化)	長谷川 清	中国において最大の人口を擁し、多数派となっている漢民族と周辺諸民族との間には、対立や接触、交流の歴史がある。そして今日もなお、さまざまな面で相互に影響しあっている。本演習では、中国大陸を含む東アジア諸地域を対象とした文化人類学的著作の閲読を中心に、文化人類学の理論と手法を修得する。論文指導では、文献・データの収集・調査・扱い方、先行研究の掌握、フィールド調査の方法など、研究を深めていくための基礎能力を高め、資料解釈・分析の手法を身につけさせる。

授業科目の名称	担当者	授業科目設定のねらいと概要
言語文化研究特別演習Ⅱ－(2) (比較文化)	長谷川 清	中国において最大の人口を擁し、多数派となっている漢民族と周辺諸民族との間には、対立や接触、交流の歴史がある。そして今日もなお、さまざまな面で相互に影響しあっている。本演習では、中国大陸東南部を対象とした文化人類学的著作の閲読を中心に、文化人類学の理論と手法を用いて個別の特定民族の社会文化状況について分析し、アイデンティティや民族文化の特質を比較検討する。論文指導では、先行研究の批判的検討、フィールド調査の資料分析などを通じて、学位論文作成に向けた基礎固めを行う。
言語文化研究特別演習Ⅱ－(3) (比較文化)	長谷川 清	中国において最大の人口を擁し、多数派となっている漢民族と周辺諸民族との間には、対立や接触、交流の歴史がある。そして今日もなお、さまざまな面で相互に影響しあっている。本演習では中国大陸西南部を対象とした文化人類学的著作の閲読を中心に、文化人類学の理論と手法を用いて個別の特定民族の宗教信仰や世界観について分析し、「民族」としてのアイデンティティや民族文化を動的に把握する。論文指導では、研究論文の発表や執筆を目標に研究内容を深めさせつつ、学位論文作成に向けた指導を行う。
言語文化研究特別演習Ⅱ－(1) (日本古典文学)	紙 宏行	授業担当者の専門の中でも、近年特に研究対象としている、顕昭著『袖中抄』を取りあげる。同書は顕昭の難義語注釈書であるが、多様な分野の文献を引用、歌人らの談話を駆使して実証的に注釈作業を進めたものである。これを読み解いて、平安末期の和歌史の諸問題について考察したい。合わせて、和歌研究、古典文学研究の現状と課題について考えていきたい。
言語文化研究特別演習Ⅱ－(2) (日本古典文学)	紙 宏行	顕昭著『袖中抄』は、歌学書ではあるが、物語や説話にも言及するところが多く、特に、物語・説話の発生については、顕昭なりの論点を持っていたようである。ここから物語・説話研究にも視野を延ばし、ジャンルを横断する研究を試みてみたい。古典文学研究の現状をふまえ、新しい視点と方法論を身につけたい。
言語文化研究特別演習Ⅱ－(3) (日本古典文学)	紙 宏行	受講者が博士論文を完成させるため、古典文学研究の現状と問題点について多角的に考察してゆく。具体的な作品を取りあげながら、やや隘路にある古典文学研究の現状を把握する。また、授業担当者のこれまでの問題意識の変遷と研究のありかたについて紹介し、受講者の論文作成に資するような方向性を示してみたい。
言語文化研究特別演習Ⅱ－(1) (英米文学)	芦田川 祐子	2019年度非開講
言語文化研究特別演習Ⅱ－(2) (英米文学)	芦田川 祐子	2019年度非開講
言語文化研究特別演習Ⅱ－(3) (英米文学)	芦田川 祐子	2019年度非開講
言語学特殊研究Ⅰ		2019年度非開講
言語学特殊研究Ⅱ		2019年度非開講
日本語教育学特殊研究Ⅰ	川口 良	本講義では、コミュニケーションにおける発話の目的やそのやり取りの諸相にアプローチするための立脚点として、語用論の諸理論について学ぶ。話し手と聞き手のやりとりで代表されるコミュニケーションにおいて、人間は、対人関係の維持やコミュニケーション上の効率などを考慮しながら、その都度判断し、言語形式を選択している。そこに働く判断が語用論的原理と言える。「個別言語を超えて人間として共通に働く語用論的原理」とはどのようなものか、語用論で明らかにされてきた理論を通して把握する。
日本語教育学特殊研究Ⅱ	福田 倫子	第二言語習得研究に関わる諸理論と方法論を学ぶ。第二言語学習および第二言語教育の分野における重要な理論の理解を深め、実際の学習・教育と結びつけながら理論、研究手法、考察の妥当性を検討する。言語面の現象だけでなく学習者の認知面、情意面にも焦点を当てる。
第二言語習得特殊研究Ⅰ	秋山 朝康	応用言語学の先行研究を概観し、基礎的知識の習得を目指します。主なテーマは言語テスト、動機づけ、タスクを扱います。文献を基に、受講生の発表と講師の講義を交えて授業を進めていきます。分担箇所については、内容をまとめたレジュメの作成および概要を発表し、その後、議論していきます。第二言語習得に関して、先行研究を基にこれまでの研究成果を概観するとともに、今後の研究テーマの可能性を探ります。
第二言語習得特殊研究Ⅱ	秋山 朝康	第二言語習得特殊研究Ⅰで学んだことを基盤に、さらに第二言語習得(英語教育)について検討します。第二言語習得のエキスパートになるために先行研究を基にこれまでの研究成果を概観するとともに、今後の研究の可能性を探ります。そして各自興味のあるテーマを決め、小規模な実証的研究を実施し、レポートにまとめ、発表してもらおう予定です。小規模研究で経験したことを自分の研究に生かしてほしいです。

実践を活かし、更なる研究へ

私は、先生のご指導のもとで、自分の翻訳の実践を活かし、1921-2018年中国における芥川文学の翻訳法を精査し、日中翻訳の翻訳学研究につなげたいと格闘しています。翻訳学は、翻訳の理論と実践に関する多面的な研究を扱い、1970年代以降欧米で発展してきたものです。まだ十分理論的構築がなされていない上に、日中翻訳の面ではまだまだ確立された方法論も理論的探究も足りないのが現状と言えます。この研究を通じ、日中間翻訳学の構築・整理を模索したいと思います。大学院では、研究の指導だけでなく、生活や精神面でも色々支えてくれます。日中翻訳研究で大学院に進学したい方は、是非ここへ来てください。



言語文化研究科 言語文化専攻博士後期課程1年
王 唯斯さん

授業科目の名称	担当者	授業科目設定のねらいと概要
日中言語対照比較特殊研究Ⅰ	蔣 垂東	現代中国語の共通語に至るまでの変遷や漢語諸方言の違いの解明にとつてのみならず、万葉仮名(音仮名)をはじめ日本、ベトナム、朝鮮半島などの漢字音の理解、研究にとつても極めて重要である中国語の音韻史、特に6世紀頃から10世紀頃までの中古音を対象に、『広韻』と『韻鏡』という中古音を反映する最も重要な基礎資料を通して、中古音のシステムについての考察を行いつつ、中古音を駆使した万葉仮名(音仮名)の解読法を例に古代日中音韻史の対照比較について探求する。
日中言語対照比較特殊研究Ⅱ	蔣 垂東	字母、韻撰、声調の順に中古音から現代中国語共通語および主要漢語方言への変遷を辿りつつ、中国語音韻史の諸問題について考えると同時に、日本漢字音との対照比較を行う。現代語への変遷においては、中国語の音韻変化の歴史、要因などについて考察し、日本漢字音との対照においては様々な視点から日中間の言語接触および日本語における中国語音受容の在り方についての探求を行う。
言語文化実地研究	—	本学の海外研修プログラムに参加した場合や、本研究科と協定を結ぶ外国の大学院で学修した場合に、その成果を単位認定する。
日本語言語文化特殊研究Ⅰ	紙 宏行	上代から中世までの日本古典文学研究のための多様な視点や方法論を理解できるようにする。また、具体的な作品を取り上げ、その主題、構想、表現方法、また成立基盤などについて詳細に調査し、研究史を辿って自ら考察を加える。取り上げる作品は、和歌・説話・物語などであるが、受講生の問題意識を絡め柔軟に対応したい。
日本語言語文化特殊研究Ⅱ	鬼山 信行	従属節とモダリティ・時制の関係を考えていく。従属節は南不二男の体系を基礎に置いて、その後の研究に目を配る。モダリティと時制は主に従属節と関係がある部分を見ていくが、モダリティ一般、時制一般についての提言も行う。
日本語言語文化特殊研究Ⅲ	鈴木 健司	宮沢賢治の詩を取り上げる。教材は『春と修羅』第一集。賢治の詩は難解極まりないものであるが、受講生には積極的に意見発表してもらい、賢治の詩の魅力や魅力を少しでも実感できるようにさせたい。『春と修羅』第一集全体を扱うことは時間的に不可能なので、「オホーツク挽歌」群とよばれる、妹としの死に関わる一連の挽歌群に焦点をあて、賢治の宗教観・宇宙観を読み解く作業を行う。宮沢賢治という詩人の壮絶な詩的営為の一端に触れられたらと考えている。
日本語言語文化特殊研究Ⅳ	鈴木 健司	宮沢賢治の童話を取り上げる。教材は「銀河鉄道の夜」。「銀河鉄道の夜」は賢治の代表作といわれると同時に、もっとも難解とされる作品である。第四次稿までの複雑なテキストをもつ本作品を、草稿状態から確認しつつ、宮沢賢治という作家が、童話というジャンルに込めた繊細かつ壮大な思想を、受講生学生の積極的な参加を前提に、読み解いていきたい。天文学や宇宙物理学、宗教学の知識が必要になるので、前もって基本的な知識を獲得しておいてほしい。
英米言語文化特殊研究	芦田川 祐子	文学理論に関する理解を深め、作品テキストをさまざまな面から批評できるようになることを目指す。英語圏の言語文化研究に欠かせない文学理論の概説書を読みながら、受講者の研究対象テキストを各理論にひきつけて考察し、構造主義、脱構築、精神分析批評、クイア理論、新歴史主義、ポストコロニアル批評、文体論など、文学批評に関する知識と理解を深める。
中国言語文化特殊研究	白井 啓介	中国近現代における表演芸術(performing arts)を言語文化の一環として考究する。1917年に始まる五四新文化運動の中では、古典文学の牢固な文語文の伝統に対抗するため、言文一致が提唱された。ところがこれは、書記言語としての革新であり、表演芸術における音声言語のあり方は未解決だった。この中で新天地を開拓した中国話劇(台詞劇)の劇本記述の構成法、表記法の特質を解明するとともに、こうした台詞構成技法が、初期の映画(無声映画)の台詞編成にどのように波及しているかを検証する。このための基盤理解として映画の中国への伝播、独自作品の生成発展についても、併せて講義する。
比較文化特殊研究	長谷川 清	中国において最大の人口を擁し、多数派となっている漢民族と周辺諸民族との間には、対立や接触、交流の歴史がある。そして今日もなお、さまざまな面で相互に影響しあっている。授業では、こうした中国大陸の諸民族を対象に、それぞれ「民族」としてのアイデンティティや文化がどのように生成し、近代以降の歴史展開のなかで、変容や再編を経てきたかについて検討し、東アジア諸民族の文化動態に関する研究を行うものとする。